

しんパレ物語

もう一つのハチ物語



天野佑紀著

プロローグ

僕たち人間の世界には、友情から生まれた暖かいお話が沢山あります。
ペットの犬達にも、きっと沢山の友情物語が有るはずです。
これから、お話するしんパル物語も、素敵な二匹の犬の本当に有った友情物語なんです。

挨拶が遅れましたが、僕は、天野雅信と言います。
僕は今、中学一年生、茨城県のつくば市に住んでいます。
宇宙の夢を追いかける宇宙センターや、鉄腕アトムのような未来のロボットを作る研究所や、ミクロの世界を探求する物理学の研究所等、沢山の研究機関が有る街で僕は育ちました。科学って、とても素晴らしく楽しい世界だって思います。
でも、科学を勉強すればするほど、人の心や動物の心の世界は、もっと神秘的で、すばらしい世界だって、僕は感じるのです。

きっとそこには、科学では説明出来ない、愛情とか友情って世界が有るからなんだと思います。
八十年も昔のハチ公物語も、今の僕達と犬の関係も、みんな愛情で結ばれているのは、どんなに科学が進歩しても同じなんですね。

その主人公の名前は、信久朗(しんくろう)とパル。
父さんと母さんは、何時もしんパルと呼んでいました、だから、しんパル物語。

血の繋(つな)がりは無いけど、二匹は兄弟以上の大親友でした。
信久朗というユニークな名前は母さんが名付け、パルという名は、父さんが名付けました。パルの語源は、韓国語の数字8（パル）から来ていて、日本語で言えばパルの名はハチです。つまり、このお話は、もう一つのハチ公物語でも有るんです。

僕が三歳の頃でした。
父さんと母さんが大事に育て、僕が大好きなパルが、僕の家で亡くなったのです。
パルが亡くなる半年前、一緒に住んでいたパルの親友信久朗が、突然行方不明になりパルは毎日、信久朗を探して泣き続けました。
でも残念ながら信久朗は行方不明のままで、パルは信久朗に会えずに亡くなってしまいました。
パルは、筑波山の山奥に埋められ、その土地には美しい花が咲いています。
きっとパルは、親友信久朗と天国で再会して、美しい天の野山を駆けめぐっているのです。
この物語は、そんなパルと信久朗の暖かい愛情一杯のお話を父さんが語ってくれたもので、僕にとっても大切な家族の物語なのです。

1 君の名はパル

ガラスドアが、叩(たた)きつける風雨(ふうう)で揺(ゆ)れています。

ドアの外は、春の嵐(あらし)が近づき、うなり声を上げる暴風雨(ぼうふうう)、とても外に出る気分にならない日でした。

父さんは、外出を止め、事務机に腰を落着け仕事をしていると、白い野良犬(のらいぬ)が玄関で父さんをじっと見つめて座っています。

全身はずぶ濡(ぬ)れ、風雨(ふうう)で毛がゆらゆら揺れていたのです。

それでも、玄関先から何処かに行く気配すら感じられず、野良犬はただじっと父さんを見ていました。

「なんだ、また居るよ・・・」

父さんは思わず野良犬を見ながら呟(つぶや)きました。

「あなたが、食パンなんかあげるからよ」

母さんがあきれて言いました。

ずぶ濡れの野良犬は、丁度一週間前に、玄関先にぶらりと現れたのです。

父さんは、白く長い毛に首輪をしているので、何処かの飼い犬だとは思ったのですが、その姿がゴールデンリトリバーに少し似ていて可愛い為、ついつい、ほんの一枚の食パンを上げたのです。

処が、それが切っ掛けで、野良犬は、毎日朝に夕に、父さんの仕事場に来る様になってしまいました。

「しっ・・・しっ・・・あっち行け・・・」

父さんは、毎日来る野良犬にほとんど困り、時にはバケツで水をバシャと掛けたり、小石を投げつけるふりをして、追い払いましたが、野良犬は、何度脅かしても、また、やってくるのです。

こうなったら、根比べだとはばかり、父さんは、野良犬を無視したり、追いかけて脅(おど)かしていました。

それでも、野良犬は、あきらめることなく、毎日毎日やって来るのです。

そして、とうとう暴雨風の日がやって来たのでした。

風雨は益々強まり、玄関のガラスドアがガタガタと音を立て、玄関先まで雨が吹き込む、大変な天気でした。

その野良犬の身体は、痛ましい程に濡(ぬ)れ、その目は実に寂しそうでした。

「困ったな・・・あんなに濡れていても、まだ行かないよ、まるで家に入れてもらうの待っているみたいだなぁ・・・」

犬好きの父さんと母さんは、そんな姿を見て、本当は直ぐにでも家の中に入れてあげたかったのですが、出来ない事情が有りました。

「あの犬を家に入れたら、飼うようになってっちゃうわよ・・・それは無理よ」

母さんが呟きました。

「そうだね・・・犬は信久朗(しんくろう)で十分なものなァ・・・」父さんもうなずきました。

その頃、僕の家には、既に二歳になる白い犬がいました。

名前は、母さんが信久朗(しんくろう)と名付けました。

信久朗は、中型犬で耳がたれ、髪の毛全体が白く短めで、ラブラドルに似た雑種です。鼻は黒いのですが、鼻の先だけが薄紅色をしています。

とても可愛いので、可愛さの余り、家の中で育てていました。

信久朗が来た頃は、まだ僕は生まれてませんでしたから、信久朗は、息子代わりに育てられ、大切に愛情を掛けて一緒に暮らしていたのです。

一緒にお風呂に入り、寝床も寝室の隣部屋に有るほどだったのです。

そんな環境なので、見ず知らずの野良犬を入れれば、父さんも母さんも、とても面倒な事になると思っていました。

だから父さんは、毎日来る野良犬を追い払う事ばかり考えていました。

もしも、その日が暴風雨でなければ、またバケツに水をくんで、あの野良犬めがけ、バシャッとばかり掛けていただろけど、さすがにその日は、風雨は強くなるばかりで、野良犬は玄関先で、悲しそうな顔つきで、父さんを見つめていたのです。

「ねえ、仕方ない、可愛そうだから、あの犬、家に入れる？」

「そうね、いくら何でも可愛そうね・・・しょうがない、中に入れてもいいわ」

父さんも母さんも野良犬を家に入れる事にしました。

しかし、それは、同時に二匹の犬を飼う事を了解しあった言葉だったのです。

「おい、ワンちゃん、そんなに中に入りたいなら、どうぞ・・・」

父さんは、家の中に居る信久朗を隣部屋に移し、野良犬を刺激しないように入れる事にしました。

ドアを開けて、野良犬に言葉を掛けると、野良犬は、嬉しいとばかり父さんの足下にすり寄ってきました。

「なんだなんだ・・・おい、ズボンが汚れちゃうよ・・・おい、おい」

野良犬は、何とも言えない切ないうなり声を上げて、父さんにすり寄ったのです。

母さんが早速バスタオルを用意して、野良犬の身体を拭いてあげました。

「このワンちゃん、本当にびしょ濡れよ、可愛そうにね・・・お前、何処にも行く処ないの?・・・お前の飼い主は、どうしたのよ・・・」

毎日何処かに野宿していたのだろうけど、野良犬の身体には、枯れた松の木や雑草が絡(から)みつき、お腹の周りはコールタールの汚れがこびり付いて、タオルで拭いたくらいでは綺麗(きれい)になりません。

母さんは、野良犬の身体を拭きながら、涙ぐんでいました。

「ねえ、この犬は首輪しているのに・・・どうしたんだろうね」父さんが言いました。

「きっと、捨て犬よ、転勤とかで、捨てていったのかもね、可愛そうに」

確かに只の野良犬では無かったのです、誰かに飼われていたと思うのは、首輪だけでは無く、その野良犬の仕草は、人間に飼い慣らされた犬だと感じる程、父さんと母さんにすぐなつき、全く警戒心を示しませんでした。

母さんが、早速信久朗用のドックフードを持ってくると、野良犬は、あっという間にほおばってしまいました。

相当お腹がすいていた様です。

「旨いだろう・・・ワンちゃん・・・これは最高の肉だからねえ・・・」

ご飯をたらふく食べ、しばらくすると、安心して落ち着いたのか、部屋の片隅にバタンと横たわり、そのままうずくまってしまった。

「この犬、だいぶホットしたみたいだね」

「でも、これで二匹の犬を飼う事になっちゃったね、これから大変よ」

母さんは少し心配でした。

「そうだな、確かに二匹は大変だ」

あの食パンさえあげなければ、こんな事にはならなかったけど、この犬は、僕の家で飼われる運命をもって現れたのです。

その日、何時間も風雨にさらされ、さすがに疲れたためか、部屋の四隅でグッタリ横たわったまま全然動こうとしませんでした。

「シロ・・・太郎・・・」

父さんは、どんな名前の犬なのか知りたくて、沢山の名前を言い、呼びかけてみました。

でもどんな名を呼びかけても、何の反応も示しません。

犬の名を呼んだ時に、少しでも顔を動かしたら、名前が合っているのかもと思って、呼び続けましたが、何を言っても野良犬は、顔を伏せたままです。

「駄目だな・・・名前、解らない・・・」

「そう・・・良いわよ、名前付ければ」

母さんがそう言うと、父さんは早速名前を考え始めました。

野良犬がやって来た年は一九八八年（昭和六十三年）で、四月でした。

この年は、お隣の国、韓国でソウルオリンピックが開催される年で世界の話は、オリンピック一色に染まっていた。

韓国語で数字の8は、パルと言い、オリンピックの別名がパルパル（88）オリンピックとも言われていて、野良犬がやって来た秋に開催する予定だったのです。

「ねえ、今年はパルパルオリンピックの年だから、犬の名は、パルってどう？」

父さんは、そのパルパルという言葉が気に入っていたので、パル（ハチ）という名前が直ぐに浮かびました。

「パルねえ・・・良い名前ね・・・八は末広がり縁起が良いし、英語ではパルは友達という意味もあるし、気に入ったわ」

母さんもパルと言う名前がすこぶる気に入りました。

「それに、この犬が来た年を何時までも忘れないしね・・・」

「よし、君の名はパルだ、なあパル、解った、名前はパルだよ」

父さんは、野良犬の頭をさすりながら、何度も名前を呼び続けました。

その日から、野良犬は、パルと言う名の息子になりました。

しかし心配なのは、別な部屋に居る息子信久郎が、パルと仲良くやれるかです。

信久郎は二歳の雄(おす)、年齢は解らないけどパルもまだ若い雄(おす)だったから、二匹が暮らす環境に不安が過(よ)ぎっていました。

そして、その不安は的中したのです。

隣部屋に居た信久郎をパルの下に近づけてみると、互いににらみ合いが始まりました。

「ウー・・・ウー・・・」

二匹は威嚇(いかく)し合い、背中(うしろ)の毛が逆(さか)立って、今にも雄同士の喧嘩が始まる寸前だったのです。

「だめよ、信ちゃん・・・うならないで・・・」

母さんが信久郎を掴み、言いました。

父さんも、パルを信久郎から離し、縄(な)に縛り付けました。

心配していた通り、雄同士で威嚇し合い、大変な事になりそうです。

やはりパルを飼うのは簡単では無いと、父さんも母さんも頭を抱えましたが、もう夜になり、その日は、とりあえず二匹を離して、休むことにしました。

翌日になると、天候は回復し、うららかな春の陽射しが広がる実に清々しい朝でしたが、パルだけでは何だか様子が可笑(おか)しくグッタリして横たわり、ゼイゼイと息をしています。

あの風雨に身をさらし、具合が悪くなった様です。

「困ったね、パルの様子が変だな・・・病院に連れて行かなくちゃ」

父さんと母さんは、早速二人で、パルを車に乗せ、動物病院に直行しました。

母さんとパルが診察室に入り、父さんは病院の待合室で待っていました。

「先生、このワンちゃん、捨て犬なんです、何か様子が可笑しくて・・・」

母さんが心配そうにパルを見つめ、獣医さんに事情を説明しました。

「う～ん・・・どうも風邪の様ですね・・・」

「風邪？、そうですか、昨日雨にずぶ濡れでしたから」

「とにかく注射しましょう、何日か通って様子見ないとね・・・」

パルは人間と同じ風邪をひき、身体を動かす事すら大変な状態になっていました。

診察が終わり、母さんとパルがドアを開け出てきました。

「パルね、人間の風邪の様なものらしいわ、二三日通って様子見た方が良いつて、先生が」

「そう、風邪か、あれだけ雨に濡れたからね、風邪も引くよなあ・・・」

重病では無い事が解りほっとひと安心したけど、それから、数日、母さんはパルを連れて診察を受けるために、病院に通い続けたのです。

数日後、パルは漸く元気を取り戻しました。

もう、大丈夫です。

母さんは、パルが元気になり、父さんに言いました。

「ねえ、獣医さんたら、面白い事言うのよ」

「面白いこと？」

「あのね、獣医さん、パルは病気で死んだ事にして、自分が飼おうかって思ったんだって」

「なにそれ？」

「面白いでしょう、獣医さん、毎日パルを診察していて、この犬は獣医さんに全く警戒をしない
そうなの、普通は、警戒してオドオドするのに、パルは何でも獣医さんの言う通りにするそうなのね、だから、とても人に慣れていて頭が良い犬だって」

パルは、獣医さんが仰向けにさせても、注射を打っても、身体を触っても、何の抵抗もせず、獣医さんの言うがまま、診察をじっと受けていたそうです。

「へー、頭良いんだ」

「だから、獣医さんが自分で飼いたい程だって・・・可笑的いでしょう」

「そうか、そんなに良い犬なんだ、それは嬉しい話だね」

「そう、パルは普通の犬じゃないのよ、やっぱり・・・」

父さんは、その話を聴いて、すっかりパルが気に入りました。

ただ一つだけ、気に入らない事が有りました。

それは病院に掛かった費用が高額でまるで血統書の犬でも飼ったに等しかったからです。

2 喧嘩を止める犬

やがてパルの大親友となる信久郎ですが、パルがやってくる、ほぼ二年前に、父さんの実家日立市に住む、お婆ちゃんが、僕の家に来てくれました。

まだ、生まれて三ヶ月程度の小さな子犬でした。

本当は、郵便局長さんが引き取る話になっていた子犬をお婆ちゃんが貰い受け、小さい買い物籠の中に入れられ、常磐線の電車に乗って来ました。

白くて小さくて、まだ「クンクン・・・」としか声が出ない子犬でした。

「うわー・・・可愛い・・・お母さん、ありがとうございます」

母さんは、子犬を見てとても喜びました。

それは、まるで赤ちゃんでも生まれた様な嬉しさです。

「子供が居なくて、牧ちゃんも寂しいだろうから、本当は郵便局長さんの家で飼われる処、貰(もら)って来てあげたから、大事に育ててね・・・」とお婆ちゃんと言いました。

母さんは直ぐさま、子犬の名前を考え始め、互いが信じ合う心を持って何時までも久(ひさ)しく、そして朗(ほが)らかに生きる、そんな意味を込めて、信久郎(しんくろう)と名付ける事にしました。

「しんくろう？なんか変な名前だな・・・」と父さんが呟きました。

「うう～ん、良い名よ・・・絶対に良い名前よ・・・良いでしょう信久郎で・・・」

父さんに相談するまでも無く、母さんは、信久郎と言う名を付ける事に決めてしまいました。

何とも不思議な名だと父さんは思いましたが、後々、信久郎というユニークな名前が、我が家に奇跡をもたらせる事になるのです、その時は解らなかったけど。

信久郎は、おとなしくて、性格は優しすぎる程でした。

滅多に吠える事が無く、人が来ても、うなり声を上げる事が有りません。

母さんは、まるで赤ちゃんでも抱くように、信久郎を可愛がったのです。

布団と一緒に寝て、部屋の中で歩かせる時は、オシッコを漏らさない様にオムツを着け、ほ乳瓶で、ミルクをあげる。

そんな生活を一年以上続けたものだから、信久郎は、本当に息子同然でした。

ある日、母さんは何事か悲しい出来事が有って、泣いていました。

涙が頬からこぼれ、悲しくて泣いていると、信久郎が母さんの下に近づき、右手を母さんの腕に何度も乗せる仕草を繰り返すと、母さんの顔をなめ始めました。

ペロペロ、ペロペロと、母さんの涙を拭うように、なめています。

信久郎は、母さんが泣きやむまで顔をなめ続けました。

その仕草は「お母さん、どうしたの、泣かないで・・・涙拭いて・・・」って言っている様です。

「信ちゃん・・・解った・・・解ったわよ・・・」

あまりになめるのを止めない信久朗に、母さんが言いました。

信久朗のなめなめ作戦は大成功！。

母さんは泣くのを止め、笑顔を取り戻しました。

何て優しい犬だろう、そして、そんな行動は一度や二度では無かったのです。

ある日も、父さんと母さんが、何か有って喧嘩していた時でした。

母さんが父さんに小言を言っていたのです。

すると、信久朗は、母さんのところに、すたすたと近づいて、母さんの左腕の上に、信久朗の右腕をのせたのです。母さん止めてと言わんばかりに。

それでもまだ、母さんの小言が続いていると、信久朗は、何度も何度も、母さんの腕に手をのせ、それから、母さんのほっぺたをなめ始めました。

「信ちゃん・・・何すんの・・・」

信久朗が、ほっぺたをペロペロ、ペロペロなめるものだから、母さんもその内、怒る気持ちが無くなり、クスクスと笑い出してしまったのです。

「全く信ちゃんたら・・・、大丈夫よ、お父さんとお母さんは、喧嘩じゃなくて、お話をしているの・・・」

きっと、信久朗は、父さんと母さんの喧嘩を辞めさせたかったんだろう。

母さんは、信久朗を見つめ

（何て犬だろう、信ちゃんには、心があるわ）と思い感心したそうです。

世の中では、夫婦喧嘩は犬も食わぬ、と言うけど、信久朗は、自らが、喧嘩を止めに入るほど、とても優しい犬です。

信久朗は、おとなしくて、穏やかな犬ですから、少しばかり気が小さい面が有りました。なにより、雷が大嫌い。

雷が鳴ると、そわそわして、母さんの所に来て、ブルブル震えてます。

ある日、父さんと母さんが家を留守にしていました。

すると、みるみる間に雷雲が発生して、辺りが暗くなって来ました。

ピカー・・・ドドドド・・・ン

とうとう雷が鳴り始めました。

「大変だ、信久朗、家で震えているよ、早く帰らなくちゃ・・・」

父さんは、雷におびえる信久朗を思い出し、急ぎ家に向かいました。

車で帰宅する途中でも、もの凄い大きな音の雷があちこちに落ちています。

「いやー、信ちゃん、おじけづいているだろうね」母さんもとても心配でした。

「ただいま・・・」

玄関の扉を開け、信久朗の様子を伺うと、信久朗は、一目山に、母さんの処に近づき、ブルブルと震えています。

「信ちゃん、ご免ね・・・怖かったでしょう・・・もう大丈夫よ、安心なさい」

母さんは、震える信久朗を強く抱きしめて、安心させました。

ところが父さんが部屋に入るなり

「うわー、大変だ！」

父さんが大声を張り上げました。

「どうしたの？」母さんもその声で駆けつけました。

「これ、見てよ・・・」

「あれーなにこれ・・・どうしたんだろう、信ちゃんは・・・」

父さんも母さんも、一点を見つめて呆れています。

なんと、信久朗が余りに怖かったのか、別な部屋に逃げようとして、ドアに穴を開けて居たのです。ドアの下部は、大きな穴が開き、ボロボロに砕けていました。

「いやー、まいったなあ・・・ドア交換しないと、高く付くぞ」

それでも、信久朗を怒る気持ちにはなれませんでした。

「しょうがないなあ、信久朗は、気が小さすぎるな・・・」

その点、パルは、雷がなくても、上の空で、驚くことも滅多に有りませんでした。

さて、そんな優しい信久朗だから、突然現れた、気の強いパルには、困惑気味でした。

パルは追い払ってもやって来た犬だから、根っから図々しい性格です。

二匹にご飯を同時に出すと、パルは夢中で自分のご飯をほおばり、あっという間に平らげ、それから信久朗の姿をのぞき込み、まだ食べている信久朗に向かって「ウーウー・・・」とうなり声をたてます。

優しい性格の信久朗は、そのうなり声を聞いた途端に、食事をあきらめ、部屋の四隅に行ってしまう。

そうなれば、残ったご飯は、パルのものでした。

よし、信久朗よくどいてくれたなとばかり、信久朗のご飯を最後まで平らげる。

気の強いパルと、穏やかな信久朗の性格が良く解る出来事で、人間の世界なら、いじめっ子といじめられっ子の関係と同じでした。

そんな出来事が毎日続くある日

さすがに信久朗にもストレスが貯まった様で、いつもの様に、パルがうなり声を上げ始めると、信久朗の様子が違っていました。

「何だよパル、これは俺のご飯だ、お前なんかにあげない！」

とばかり優しい信久朗が、パルに向かってうなり声を上げ始めたのです。

「何だ信久朗、お前俺に逆らうのか・・・」とでも言うように、パルは信久朗を睨(にら)み付け、うなり声を上げました。

二匹は、互いに睨み合い、とうとう、喧嘩が始まってしまいました。

「ウー・・・ウー・・・」

「ガオー・・・」

二匹は取っ組み合いの喧嘩を始めてしまったのです。

とんでもない喧嘩が始まりました。

父さんは、驚いて、二匹の間に入って、喧嘩を止させました。

「何してるんだ・・・パル・・・信久朗、止めろ！」

父さんが大声で叫び、二匹を引き離しました。

「ダメダメ、信久朗、パル・・・喧嘩はダメだ・・・」

父さんは、二匹をととても厳しく叱りました。

頭を叩き大声で叱りつけました。

父さんが、信久朗とパルを本気で叱りとばすと、二匹は、急に温和しくなり、縮こまってしまいました。

二匹は、怒鳴りつける父さんの姿を初めて見たのです。

信久朗もパルもビックリして、小さくなって震えていました。

それから父さんは、二匹を許してあげました。

暫(しばらく)くして父さんは、二匹を近づけると、もう睨み合いも、うなり声も言わなくなりました、そこで、父さんは、二匹を近づけて、話をしました。

「おい、お前達、仲直りしろ、お前達は家族じゃないか！」

信久朗とパルの顔を近づけて、鼻と鼻を付け、頭をなでてやると、信久朗とパルは、ご免ね・・・と言うばかりに、互いに顔をなめ始めたのです。

「ペロペロ・・・ペロペロ・・・」

信久朗はパルを、パルは信久朗を互いになめ合いました。

パルが家に入り込んでから、初めて二匹が仲良くした瞬間です。

この日から、不思議にも信久朗とパルは、全く喧嘩をしなくなったのです。

人間で言えば、いじめっ子といじめられっ子との和解です。

最高の友達が出来た瞬間だったのです。

ご飯の取り合いも無くなり、信久朗とパルは、本当の兄弟の様に毎日仲良く過ごし始めました。

3 迷子になった信久朗

父さんは、朝と夕方、決まって二匹いっぺんに綱を持ち、散歩を行うのが日課になりました。信久朗とパルは、あの喧嘩以来大の仲良しになり、二匹連れ添って散歩をしていました。

二匹とも毛の色は白く耳が垂れ下がり、体格体重は殆ど同じ姿で、顔つきまでも似ていて、何も知らない人達は、本当の兄弟犬と勘違いする程だったのです。

違うのは、毛の長さで、パルの毛は長くて性格が図々しく、信久朗の毛は短く、おっとり優しいところでした。

そんな二匹を散歩させていると

「あらまあ、可愛いワンちゃん達だわね、どっちがお兄ちゃん・・・」

などと声を掛けられたり、子供達に「わーかわい～・・・」と言っては名前を尋ねられます。

「このワンちゃん名前はねえ、信久朗とパル、しんパルよ・・・」

母さんは優しく子供達に説明をしました。

「しんくろうだって、ハハハ・・・」

「しんくろう・・・変てこりんな名前だなあ」

正直な子供達は、そう言って笑い出します。

でも、信久朗とパルという名は、あっという間に近所に広がり、子供達との楽しい交流が続きました。

家の前を通学する小学生にもすっかり人気者。

毎日、沢山の子供達が、信久朗とパルの名前を呼んでは近づき、頭を撫(な)でて行きます。

「あー、パルだ、パルがいる、さわろっと・・・」

女の子達は、パルのふさふさした毛を撫でるのが楽しみになりました。

信久朗もパルも、小学生達が大好きで、シッポを振ってみんなと仲良くするのです。

だから、番犬としては、あまり役に立ちません。

誰が来ても、シッポを振って愛想振りまくのですから。

二匹仲良く散歩するのは、とても良かったのですが、さすがに、若いオス犬二匹を散歩させるのは一苦勞で、母さんには、少しばかり大変な事でした。

大人でも二匹が急に駆け出すと、引き留めるのに一苦勞、引っ張られて、綱を持つ手が真っ赤になったりします。

＊

パルが家族になって、半年が過ぎました。

朝晩がとても冷える、初冬の季節を迎えました。

そんな時、父さんは、寒さのせいか、突然腰痛になってしまったのです。
自分独りで歩くのもやっとで、とても信久朗とパルを散歩させる事など出来ません。

「ご免、散歩に連れて行けなくて・・・」

父さんは母さんが散歩で大変になっていたので、そう言いました。

「大丈夫よ、何とか二匹仲良くしてるから」

「でも、かなり引っ張られるだろう・・・危ないよね」

「まあ、確かに駆け出すと大変だけど、何とかね・・・」

母さんは、父さんが歩くのもやっとなので、二匹の散歩は自分がするしかない、頑張りました。

そんな毎日が続く、ある日の事です。

「ねえ、たまには信久朗とパルを、綱無しで伸び伸びと遊ばせようか」

父さんは、母さんが散歩で大変なので、そう言って、何処か広い場所で、散歩させると提案しました。

「そうね、たまには良いわね・・・じゃ、何処か広い土地さがして、放しましょう」

早速、父さんと母さんは、信久朗とパルを自動車に乗せて、広い土地を探しに走り出しました。
つくば市の郊外を車でぐるぐる回り、どんどん走り続け、二十分位すると、田んぼが広がる場所にたどり着きました。

「よ～し、ここなら放しても大丈夫じゃないか、誰にも迷惑掛けないし・・・」

早速、車から降りて、あぜ道で、信久朗とパルを放してあげました。

何時も綱に繋がれている二匹は、綱を付けずに放されたので、大喜び。

初めは、二匹じゃれ合って、楽しく遊んでいたのですが、しばらくすると

信久朗は、一直線に掛けだして、あっという間に、姿が見えなくなっていました。

「あれー・・・信久朗、何処行ったんだ・・・」

父さんは、信久朗が掛けだした方向を見つめ、信久朗を探しています。

でも、信久朗の姿は何処にも見えません。

パルは、初め信久朗と一緒にでしたが、十分も経たない内に、母さんの下に帰りました。

でも、信久朗は、帰ってきません。

「どうしたのかな？・・・信ちゃん、どこにいったのかしらねえ・・・」

今まで、放し飼いにしても、信久朗は、見えなくなる程遠くに行くことは有りませんでした、父さんと母さんの直ぐそばで、何時も遊んでいたのに、今日だけは、様子が変わります。

仕方がないので、その場所で、信久朗を待ってみる事にしました。

三十分・・・一時間・・・二時間・・・今帰るだろうと、ひたすら待ち続けました。

でも、信久朗は帰りません。

もう、陽が暮れ初め、辺りは薄暗くなってしまいました。

「困ったなあ・・・」

父さんも母さんも、ほとんど困りました。

「もう、これ以上待てないな、これ以上居ても、夜になるだけだし・・・どうしようね」

信久郎が見えなくなって、既に四時間が経ち、夜になってしまいました。

「ダメだね、これ以上待てない、明日の仕事の準備もあるし、帰るしかないな」

父さんは、とても苦しみました。

まるで、息子が迷子にでもなってしまった様に、心配でたまりません。

「しょうがないわ、心配だけど、ここに何時までも居られないし・・・」

「僕は、明日の朝、仕事の前に、ここに来てみるよ・・・」

「そうして」

何時間待てども、帰らない信久郎を探すことを断念して、帰宅する事になりました。

家に着いても、父さんと母さんは、落ち着きませんでした。

心配で、夜も眠れません。

翌朝、陽が昇るとと、父さんは、早速昨日の場所に行きました。

「信久郎・・・信久郎・・・信久郎・・・」

父さんは、大声で、信久郎の名を呼び続けました。

田んぼだけでなく、近くの民家、林、を車で回りながら探しました。

「信久郎・・・」何度呼んでみても、信久郎は現れません。

「ダメか・・・」父さんはとてもガッカリしました。

その日から、毎日、朝に夕に、仕事の前と、仕事が終わった時から、居なくなった場所近くを、探し回りました。

毎日、毎日、探し回りました。

一週間が経ち、二週間が経ち。

でも、何の手がかりもつかめません。

「ダメだ・・・毎日あの辺うろうろしても、信久郎は見つからない」

父さんは、すっかりしょげ返りました。

母さんも、信久郎が居ない寂しさで、心が張り裂けそうに、悲しくてたまりません。

唯一、心の慰めは、パルが居る事でした。

「しかし、パルが来た途端、信久郎が居なくなるなんて、こんな事が起こる事を知っている神様が、パルを僕たちによこしたとしか思えないね・・・」父さんが呟きました。

「本当にそうね、まさか信ちゃんが、こんな事になるなんて・・・」

信久郎が居なくなって、半月が過ぎようとしていました。

父さんも母さんも、息子が行方不明になってしまった気分を味わっていました。

心配と、後悔と、不安の心で一杯でした。

そんな時です、土曜日の朝、父さんは、つくば地域に発行しているコミュニティ新聞の探しもの欄が目に入りました。

〇〇メス猫をさがしてます・・・新聞には、何人もの人が犬や猫を探していたり、拾ったので飼いませんか等と、書いてありました。

「ねえ、この新聞にさ、信久朗の事載せてもらおうか・・・」

父さんは、母さんに提案しました。

「そうね、この新聞に載せようか、もしかしたらって事あるかもね」

父さんは、早速新聞社に連絡して、信久朗の事を記事にしてもらう話を付けました。

つくば市〇〇で白いオス犬、行方不明。

見かけた方、ご一報下さい。

翌週の土曜日。短く小さい文字で掲載されました。

新聞に掲載してはもらったものの、数日経っても何の連絡も有りませんでした。

父さんも母さんもガッカリしました。

「この位の広告じゃ、無理だよね、やっぱり」

確かに、文字は、ヨコ1センチ、タテ3センチの小さな枠の中に書いてある内容ですから、よほどの事が無いと見逃してしまいます。

新聞を手にして、沢山の情報からとても小さい記事を見て判断するのですから、数十万分の一位の確率でしか見つからないだろうと、父さんは思いました。

それでも父さんは、あきらめられません。

その次の週にも、また掲載しました。

すると、今度は、二件のお家から電話が入りました。

でも、その二件とも信久朗では有りませんでした。

せっかく連絡もらったのに、全部違う犬だったので、これまた、父さんはガッカリです。

「残念だね、こんな小さな記事じゃ、駄目だね・・・」

父さんはすっかりしょげていました。

あんなに大事に育てた、信久朗と二度と会えないと思うと、悲しくてしかた有りません。

母さんも時折、信久朗の事を思い出して、涙ぐんでいました。

信久郎が行方不明になって、とうとう一ヶ月が過ぎてしまいました。
二度も新聞に掲載して、毎日の様を探しに行って、それでも、信久郎は見つからない。
父さんも母さんも、もう難しいかも知れないと感じていました。
でもあきらめては居ません。いや絶対にあきらめられないのです。
しかし、見つけるのは奇跡としか言えませんでした。

イギリスの名犬ラッシーの様に、ただいまと、帰宅してくれる奇跡を信じるだけでした。
ただ、それにはとても大きなハードルが有るのです。
信久郎が、家から飛び出して行方不明になるなら望みも有りますが、家から車で二十分も離れた郊外、しかも初めて尋ねた場所でしたから、信久郎には、自分の家がどこに有るのか解るはずありません。

唯一、犬の感の鋭さだけしか頼れません。
でもそれは、奇跡中の奇跡でした。
新聞の広告すら、1%の奇跡としか言えません。

父さんは、あの時、信久郎を放し飼いになんかしなければよかったと後悔ばかりしていました。
放すなら、小さな公園でも良かったのに、よりによって、見ず知らずの土地で、放したのが悪かったと、くよくよしてばかりです。
だから、どうしてもあきらめがつきません、自動車にはねられて怪我でもしたのだろうか、死んでしまったのだろうか、誰かに拾われたら良いけど、色々な事が頭によぎります。

内より信久郎は、息子同然でしたから、その子が居なくなったのですから、穏やかに過ごすなんて出来ません。
本当の子供なら、どんな手段をとっても探そうとするでしょう。
父さんも母さんも必死でした。
あきらめないで、めげないで、探すしかないと思っていました。
だから、もう一度、もう一度だけ、信久郎を探す方法を考えてみよう、そう思いました。
そして父さんは、新聞の、その1%の奇跡に再び掛けてみようと思いました。

「ねえ、もう一度だけさ、あの新聞に掲載してもらおうか・・・」
父さんが、母さんに再度提案しました。
「ええ、もう一度出すの？どうかしらねえ・・・」母さんは、首を傾げていました。
「いや、三度目の正直でさ、もう一度だけ出してさ、これで、見つからないなら、探すのを辞めるよ、信久郎は、きっと誰かの家で飼われている、そう信じて」
「そうね、駄目で元々、もう一度掛けてみようか」
父さんと母さんは、最後の1%の奇跡に掛けてみる事にしました。
さて、そうすると、父さんは、再び新聞社に連絡して、再度記事を掲載してもらおう交渉をするのですが、さすがに三度も同じ人が出すのは気が引けます。
でも、父さんは、あきらめきれず、新聞社に交渉しました。

そして、掲載の許可が下りました。
今度の掲載には、一つだけ工夫しました。

つくば市〇〇で、犬が行方不明。名前は
シンクロウです。情報有れば、御連絡を。

今回の記事には、信久朗の名前を書いたのです。
一度目と二度目は、ただ白いオス犬としか書きませんでしたから、三度目は、シンクロウと書いてみたのです。

その、新聞は、土曜日に発行されました。
その日は、何の連絡も入りません、やはり無理な事かと、不安な気持ちで休みました。

翌朝になりました。
今日は日曜日なので、仕事が休みの父さんは、朝食を終えてのんびりしてました。
時計の針が、午前八時を指していました。
すると、りりり〜ん、りりり〜ん 電話が鳴りました。
「誰だろう、日曜のこんな早くに電話するなんて・・・、おふくろかな？」
とにかく電話に出してみました。
「はい、天野です、どちら様ですか」
電話はお婆ちゃんでは有りませんでした。

「あの一僕、鈴木と言いますが、昨日、新聞に犬を探している事載せましたよね」
電話は、つくば市の隣町、土浦市の中学生からでした。
「ええ、載せました」
「あの一、新聞にシンクロウって書いていたので、僕の近所で野良犬が居て、シンクロウって呼んだら、付いてきたんです、もしかしたら、あの犬がシンクロウじゃなかと」
「ええ・・・信久朗って言ったら付いた来た・・・どこですか・・・」
「土浦の・・・」
父さんは、とても驚きました。
なんと、その場所は、つくば市では無く隣町土浦市、場所が少し離れていましたが、信久朗が居なくなった場所から二キロくらいの処なので、そこに居ても可笑しくないと思いました。今度の情報は、本物かも知れないと、直感しました。
「それじゃ、直ぐにそちらに、行きますので・・・ありがとうございます」

それから、父さんと母さんは、大急ぎで、鈴木さんという中学生を尋ねました。
「今日は、連絡ありがとう」父さんは、中学生にお礼しました。
「あの、僕んちは、犬が何匹も居るんで、直ぐ近くのお爺ちゃんのお家に、その犬がいますので

、そこに案内しますので」

そう言われて、父さんと母さんは、一目山に、中学生のお爺ちゃん宅に向かいました。

門を開け、中学生が、お爺ちゃんを呼びに行くと、中から、老夫婦が出てきました。

「あー、昨日ね、犬預かったんだけど、お宅の犬なら良いけどね」

お爺ちゃんがそう言うと、裏庭に行き、犬を連れて来ました。

痩せこけた、薄茶色の犬が遠くから近寄って来ました。

でも、その姿は、とても信久郎には見えません。

違う犬の姿に見えました。

しかし段々近づき顔を見た瞬間、父さんは、信久郎だと直感しました。

「信久郎・・・」「信ちゃん・・・」父さんも母さんも、大きな声で呼びました。

すると、薄茶色の犬は、一目山で、父さんの処に駆け寄り、玄関先で、ジャンプすると、

「グウー〜ン・・・ウ〜・・・」

と切ない叫び声を上げて、父さんの胸元に飛びついて来ました。

やった！

やはり、薄茶色の犬は、信久郎だったのです。

とうとう、信久郎が見つかったのです！

あきらめない心に答えが届く、1%の奇跡が起こった瞬間でした。

父さんと母さんと信久郎は、互いに抱き合って、泣きました。

「信久郎・・・生きてたのか・・・良かったな」

「信ちゃん、心配してたんだよ・・・」

母さんの顔は涙で顔が、ぐちゃぐちゃになっています。

信久郎は、漸(しばら)く再会出来た興奮からか、体中で息をして、震えていました。

嬉しさと、安心とが混ざった顔つきで、信久郎は、父さんに抱かれています。

「良かったですね・・・、おとなしいワンちゃんなのでね、飼い主が見つからなければ、内の家で飼うつもりでした」お婆ちゃんが言いました。

「本当に、ありがとうございます」

信久郎が居なくなって、四十日が過ぎ、ようやく家族が再会出来た喜びはひとしおです。

それにしても、居なくなった場所から、二キロも離れて、信久郎は、随分歩き回った様ですが、確実に家に近づいてはいたのです。

信久郎は、必死に家を探し続けて、歩き回ったのかも知れません。

信久郎が見つかった事はとても嬉しい事です、ただ、信久郎の姿を見て、父さんも母さんも、悲しくなりました。

それは、信久郎のあの白くきれいな毛は、まるでバリカンで刈られた様に、ほとんど無くなっ

ていたからです。

薄茶色に見えたのは、毛が無くて地肌が見えていたからでした。

それだけでは有りません、信久朗の口の左右には牙が突き出ている、まるでオオカミのような顔つきになっていました。

その夜は、久しぶりに、家族みんなが安らかな気持ちで居ました。

父さんは、信久朗の身体を、お風呂で丁寧に洗いました。

信久朗の白い綺麗な毛は、どこにも有りません。

まるで身体全体がたわしの様に、短くゴワゴワしていました。

「そうとうなストレスだったんだね、こんな姿になるなんて・・・」

「そうね、あのきれいな毛が無いって、ほんとかわいそうだわ」

四十日の間に、信久朗の姿は様変わりして、見るも無惨(むざん)な姿に変わってしまったのです。耳を洗い始めて、父さんは驚きました。

「ねえ見て、耳が切れてるよ、ほら・・・きっと野良犬に咬まれたんだ」
かわいい垂れ下がった左耳は、引き裂かれ、血の後がはっきり残っています。

信久朗は、大切に育てられてきました。

他の犬と喧嘩なんかしたことは一度も無く、食べ物だって何時も美味しいドックフードだった。そんな犬が、独りで、生きぬいて、食べ物もゴミをあさるしか無かったかもしれない、もしかすると、他の犬のご飯をもらおうと近づいて、咬まれたかもしれない、とにかく、信久朗の姿は異常でした。

それから母さんは、汚れた信久朗に暖かい毛布を掛け、添い寝をして休みました。

信久朗もようやく安心して、ぐっすり眠りました。

こうして、漸く、父さんと母さんと信久朗とパルの暖かい安らぎの生活が帰ってきたのです。

あきらめない心に神様がそっと微笑んでくれた、そんな夜になりました。

本当に良かった！

信久朗が帰り、僕の家にもやっと安らぎが戻りました。

数ヶ月経つと、信久朗の毛も元通りに戻り、あの恐ろしい牙が無くなりました。

環境の違いって、本当に大きなもので、信久朗もとても安心したのでしょう、あのおっとりした、優しい信久朗に戻ったのです。

でも、三つだけ、信久朗は変わりました。

一つ目は、食べ物です。

迷子になる前は、ドックフードとペットのお菓子しか食べない犬でした。

ところが、帰ってきてからは、父さんと母さんが食べる物を何でも欲しがります。

ミカンでもリンゴでも、お菓子でも、何でも欲しがっては、おかわりと、右手を出してきます。

「何だよ、信久朗・・・これは、トウモロコシだよ、お前の食べ物じゃないよ」

そう言いながら、父さんは仕方なく、トウモロコシをあげてみると、トウモロコシを手で押さえ、きれいに食べてしまいました。

父さんが、おせんべいを食べていると、すぐ右手をだして欲しいと言うのです。

「いやー、こんな物まで食べちゃうのか、お前は・・・」
ゴミをあさって食べたのでしょうか、とにかく何でも食べてしまうのには、父さんもビックリです。

二つ目は、散歩していると、他の犬を見て、吠える様になった事です。
それも、迷子の前には考えられない行動でした。
四十日間、沢山の犬と遭遇して、沢山の喧嘩もしたのでしょう、切り裂かれた耳がそれを物語っています。おとなしい信久朗は、どんな犬と遭遇しても、吠えなかったのに、帰ってからは、吠えたり、飛びかかったりするので、父さんも困りました。

三つ目は、自動車が近づくと、逃げ様とするのです。
家に帰りたい一心で、道路を歩いたのでしょう、そして、何度も車にひかれそうになったに違いありません。散歩をして、車が近づくと、立ち止まったり、脇道に逃げようとするのです。これほど、自動車が怖くては、土浦市からつくば市の自宅まで、帰りたくとも、帰れなかったでしょう。
犬だって、人間と同じで、環境が変わると、性格まで変わるんだね。

さて、親友になったパルだけど、信久朗が帰ると、仲良く生活を始めました。
少し前に、大喧嘩したとは、思えないほど、二匹は大の仲良しになりました。
家でもいつも二匹が一緒に居ます。
寝る場所も、何時も隣り合わせ、ご飯も仲良く食べ、互いに、顔をなめ合うほど、仲良くしていました。うなったり、喧嘩したりする事が無くなったのです。

何時も信久朗が、パルの顔をペロペロ、ペロペロとなめます。
パルは、それが気持ちいいのか、信久朗がなめるままに、目を閉じて、横になっています。
それが、毎日の日課になりました。

信久朗とパルは、なかよしこよしの、本当の兄弟犬になった様です。
家に飛び込んできたパル、迷子から帰った信久朗、二匹には、飼い主が居なくなった共通の悲しみが有りました、僕たち人間だって、友達が悲しんだりすれば、慰めるよね、きっとパルと信久朗は、お互いに、慰めあってペロペロなめていたんだ。

5 詐欺師をやっつけろ

この頃、父さんは、インテリアの仕事を経営する様になっていました。

会社の社長さんです。

毎日、何人もの人が父さんと面会するために仕事場に来ていました。

建築会社の社長さんや、職人さん、建材メーカーの営業マンさんと、何人もの人と会っては、お話をします。

その時、信久朗とパルはどうしているかと言うと、父さんの職場の事務室に自由にさせてもらってました。

人が来ても、鎖に繋がれる事も無く、本当に自由にしていたのです。

来客の人も、そんな信久朗とパルを見て、驚くことも有りません、何せ、子供が居るのと同じだったので、みな信久朗とパルを可愛がってくれたからです。

ある日のこと。

「こんにちは・・・」

と紺色の背広姿に、黒い皮バックを提げた、見知らぬ男が、突然入ってきました。

「どちら様ですか？」父さんは、初めて会うその人に、訪ねました。

「あの一、私・・・」

とその人が挨拶しようとする、突然、パルと信久朗が近寄ってきたのです。

いつもなら、しっぽをふって出迎える二匹なのに、その時だけは違いました。

「うー・・・うー・・・」

パルと信久朗は、その人に向かってうなり声を上げ始めました。

「どうした、パル、信久朗・・・」父さんは、珍しくうなる二匹に驚きました。

母さんもその声を聞いて、部屋から飛び出して来ました。

それでも、信久朗とパルは、その人を見て、うなり声を止めません。

むしろ、さらに殺気だって来ました。

「どうしたの、信ちゃん・・・」母さんは、優しい信久朗まで、唸っているので、思わず信久朗の首輪をつかみました。

父さんも、パルの首輪を持ちました。

父さんと母さんが、信久朗とパルをつかむと、信久朗もパルもおとなしくなるどころか、むしろ、さらにうなり声が大きくなり、その人に飛びかかる寸前でした。

「どうした・・・駄目だよ・・・お客さんなんだから・・・」

父さんは、あわてて、信久朗とパルの綱を引き寄せ、事務机に綱を結び、信久朗とパルが机から動けない様にしました。

「済みません・・・いつもは吠えない犬なんです、どうも・・・ごめんなさい」

父さんは、その人に謝りましたが、信久朗とパルは、まだうなり声を辞めないのです。

母さんが、なだめに入り、漸く、二匹はおとなしくなりました。

そして、父さんとその男の人は、応接室のソファで話を始めたのです。

ところが、今度は、父さんが落ち着きません。

その男と話をしていると、なんだか話がおかしな方向になっていったからです。

父さんは、心で思いました。

（何だこの男、僕をだましに来た詐欺師なのか？）

何十分か話をしていて、はじめは父さんも、その男がおかしな人とは思っていませんでした。ところが、どうも話が段々詐欺めいてくるのです。

今すぐお金を準備して欲しい、どうのこうのと――

父さんは、途中で、この男は詐欺師だと感じ始めました。

（信久朗とパルがあんなに吠えることなんて、今まで一度も無い、この男が悪者だって、解るんだ、それが見抜けてたんだ）と思いました。

父さんは、信久朗とパルの異変に、今になってそれがただならぬ事態のサインだと思ったのです。

そう思うと、事態はまた急変しました。

まだ、だまされる前でしたから、父さんは、その男を見ながら、反対に、意地悪な返事を返してみました。

「お宅の会社、本当に名刺に書いてある所に有るの？」

すると、今まで紳士的に応対していた男の顔色が変わったのです。

「お客様何言ってるのですか、まさか事務所は有りますとも、お疑いで？」

そう言いながら、男の顔はかなり引きつり始めました。

「そうですか、それなら、あなたの会社調べますから、この名刺のところに今すぐ電話します」

そう言うと、父さんは、その男が出した名刺に書いてある電話をかけ始めると、

「ちょっと待って下さい・・・」

と言うと、男は、急に立ち上がり、電話するのを止めようとししました。

やはり、益々怪しい話です。

それでも父さんが、その会社に電話してみると、普通の会社の対応では無いと直感しました。

（可笑(おか)しいな、電話の話し声が、普通じゃ無い）父さんは心で思いました。

父さんは、その男に詰め寄りました。

すると男は、何の説明もしないまま逃げ出すように外に出て行ってしまいました。

信久朗とパルは、その男ををまた追いかけて、吠えています。

やはり、男は、詐欺師でした。

父さんは、見事だまされる寸前でしたが、信久朗とパルは、初めから、男が変な詐欺師だと解っていたのです。

「信久朗・・・パル・・・お前達偉いな・・・あいつは、詐欺師だ、お前達に助けられたなあ・・・ありがとう・・・」父さんは、信久朗とパルの頭を撫でて礼をしました。

実に不思議な、犬の直感だと、父さんは感心しました。

その後、二度と、我が家には、詐欺師は現れません。

信久朗とパルが、父さんを守ってくれたのです。

それからも、信久朗とパルは、仕事場の中で、二匹仲良く暮らしました。

パルが僕の家に入り、桜の花びらが、毎年散る中、パルと信久朗は、大親友として、家族として
沢山の思い出を作り続けたのです。

1 ツバメの巣作り

一九九七年（平成九年）四月。

パルが僕の家に住むようになって、十年目の年になりました。

相変わらず、父さんと母さんと信久朗とパルの愛情溢れる家族生活は続いていました。

その間、信久朗とパルは本当の兄弟のように仲良しこよしで、過ごしていたのです。

寝るときも、何時も隣り合わせ、頭をくっつけて眠る事もしばしば。

散歩も、ご飯も、父さんとドライブも何時も一緒です。

父さんと母さんの愛情をたっぷり受けて、二匹はとても幸せでした。

穏やかな南風が吹き寄せ、草花が咲き、ミツバチが花の蜜を求めて飛び回り、お日様の日射しが暖かく感じる、ある日のことです。

「ねえ、あれ見てごらんよ」

父さんが大声で、母さんに言いました。

父さんは、軒先を指さして、母さんに何かを伝えています。

「うわー、珍しいわね」

母さんが、じっと軒先を見つめました。

軒先に、ツバメが巣を作っていたのです。

「すごいな・・・この家にツバメが巣作りするなんて、初めてだよ」

「そうね、初めてね、今年は縁起が良いこと起こるのかしらねえ」

母さんは、ツバメが巣作りをする事は、家に福が訪れる知らせだと感じました。

それもそのはず。

一九九七年（平成九年）十二月二日。

「おぎゃー・・・おぎゃー・・・」

この年、僕が誕生しました。

ツバメは、僕が生まれる年だけ、僕の家にも巣を作り、それから一度もそんな出来事が無かったそうで、父さんは、未だに不思議な年だと話しています。

犬も、鳥も、色々な動物達は、愛があるところに引きつけられて、やってくるんですね。

僕が生まれる事を知っている様に、ツバメまでが巣を作るなんて、本当に神秘的な出来事です。

さて、僕が生まれると、お婆ちゃん、お爺ちゃん、親戚、父さんや母さんのお友達が、毎日の様に訪問しては、僕をだっこしました。

ところが、訪問するみんなが一つ気に入らない事が有りました。

それは、犬が家の中で一緒に居たからです。

「あの、犬と赤ちゃん一緒じゃない方が良いですよ、犬がなめると、ばい菌が移るよ」

「信久朗とパルの手で、引っかけられたら、赤ちゃん傷つくわよ、駄目よ、同じ部屋じゃ」

お婆ちゃんや父さんのお友達は、家の中に大きな犬が居ると、赤ちゃんが危険だと心配しました。

でも信久朗とパルは頭が良くて、僕を傷つける事など一度も無かったのですが、それでも、やはり赤ちゃんが居る部屋に、犬が居るのは大変だからと、周りの人達に説得され、父さんは、庭に犬小屋を造り、信久朗とパルを住ませる事にしました。

「出来た、これで信久朗もパルも何とか寝れるだろう」
父さんは、庭に犬小屋を準備しましたが、綱を付けたまま生活させる事だけは、避けました。今まで部屋の中で自由に歩いていたのに、外に出した途端、繋ぐのは抵抗が有ったからです。ただ、一つだけ心配でした。
信久朗とパルが、庭から、飛び出して近所に行ってしまうまいかと。

父さんの心配は当たりました。
庭に出した途端、二匹は、外に飛び出して、遊ぼうとするのです。
「こらー・・・パル・・・信久朗・・・」
父さんが知らぬ間に、信久朗とパルは、家から抜け出し、近所の畑で、遊び回って居ます。
門扉の小さな隙間から、抜け出したり、塀をよじ登ったり、パルなどは、塀によじ登るのが得意になり、まるでこま犬の様に、塀の上に座り逃げ出すチャンスを伺うのです。
時には、事情を知らない人が玄関の門を開けた途端に、信久朗とパルは、ささっと、その合間をくぐっては外に飛び出します。
そして逃げ出すと必ず二匹一緒に行動します。
畑でじゃれ合い、近所を散策するのも、何時でも一緒。
遊び仲間、親友となった信久朗とパル。

その出来事が、何度も起こると、困るのは何時も父さんです。
信久朗とパルが抜け出す度に、父さんは、連れ戻す為に、近所をうろうろします。
大概是、家から見える範囲で二匹は遊んでいます、時より、どこに行ったか解らない日も有りました。
そんなある日、電話が鳴りました。
「もしもし、天野ですが・・・」
「あのねえ、お宅の犬達でしょう、何で放し飼いにするの、内の犬と喧嘩して大変なのよ、駄目よ放しては！・・・直ぐに繋ぎなさいよ！」
電話は、見知らぬ叔母さんでした。
叔母さんは、凄い剣幕で父さんを叱ってます。
「済みません・・・あ、どちら様で・・・今お詫びに・・・」
父さんは電話を持って頭をペコペコ下げていました。
「良いわよ、来なくて、とにかく、犬を放し飼いなんかにしないで頂戴！」

「解りました、済みません」

「解ったわね、放さないで」ガチャ 電話が切れました。

信久朗とパルは、何年も家の中で暮らす生活から解放され、外に出るのが楽しいのです。

仕方ありません、人間と違って、抜け出すのが駄目だとは思わないのですから。

信久朗とパルは、逃げ出すのが得意になってしまいました。

父さんも、いちいち怒る訳にもいかず、二匹に事情を話す事も出来ず困りました。

その事が有ってからは、金属製の長いワイヤーロープを買ってきて、信久朗とパルに繋げる様にしました。

長いロープで繋がれば、あきらめて、その場所に居ます。

でも、父さんも母さんも、それが可愛そうだと感じていました。

2 行方不明の信久朗

二〇〇〇年（平成十二年）夏でした。

信久朗が生まれて、十三年。

パルは幾分信久朗より歳を摂っている感じでしたから推測(すいそく)すると、十四歳位になります。

犬の年齢は、人間の七倍くらいだそうですから、人間で言えば、もう八十～九十歳位の老人と同じ歳になりました。

そんな頃、僕も、二歳半になり、散歩が一緒に出来る様になりました。

信久朗とパルを父さんが散歩させる時、僕も一緒について行くのが楽しみです。

「パパ・・・パル・・・かわいい・・・」

僕は信久朗とパルをなでなでするのが大好きでした。

パルは、まるでムートンの毛皮でも触る様にふさふさした毛で、撫でると気持ちが良いのです。信久朗とパルも、僕が家族だって良く解っていて、僕にはシッポを振って、身体を近づけます。時々信久朗にぺろっと顔をなめられると、僕はビックリして、逃げ出しました。

もう信久朗とパルは、ロープで繋がれた生活をしなくても、何処にも逃げない様になっていました。

若い時は、塀をよじ登るのもすこぶる簡単でしたが、今では、その塀に手を掛けるのも出来ません。

パルは、後ろ足が、よろよろして、散歩するのもやっとでした。

父さんもそんな信久朗とパルが可愛そうなので、ロープに繋ぐのを止めて、庭を自由に歩かせていました。

処がです、ある日、信久朗が、玄関が開いているのを見て、外に飛び出してしまいました。いつものように、父さんは、近所を探したのですが、信久朗が見つかりません。

その日は、とうとう信久朗が帰りません。

「どうしたんだろう、信久朗・・・」父さんも母さんも心配しました。

この十三年間、家から飛び出しても、家に帰らない日は一度も有りません。

それなのに、信久朗は帰りません。

夜も、父さんは、近所を探し回りましたが、やはり見つかりません。

「困ったわね、どこ行っちゃったのかねえ、信ちゃん・・・」母さんもとても心配です。

もしかして、交通事故でも有ったのかと、夜も眠れませんでした。

その翌日です。

近所の叔母さんが、僕の家に見かねてきました。

「あのね、お宅の犬、畑で倒れているわよ、大丈夫かしらね」

父さんは、近所の叔母さんが言う畑に、飛んでいきました。

何と、信久朗は、畑の中の網に絡まって身動きが出来なかったのです。

手足に網が絡みつки、横たわり、グッタリしていました。

「信久朗・・・何だよお前・・・」

歳を摂った信久朗には、網をちぎるだけの力が無かったのです。

問題はそれだけでは有りませんでした。

信久朗の耳の直ぐ後ろの頭に、傘先か何かで刺された深い傷が有り、血が流れていました。

「どうしたんだ、信久朗・・・何だ、この傷は・・・傘か・・・」

父さんは、その痛々しい傷を見て驚きました。

何センチも深く頭に穴が開いているのです。

早速家に帰り、獣医さんに見せて治療をしました。

幸、命には別状が有りませんでした。その傷の深さが心配でした。

翌日、父さんが信久朗を呼びました。

「信久朗・・・信久朗・・・ご飯だよ・・・」

父さんが、信久朗を呼んでも、信久朗は、何も反応しません。

「おい、信久朗・・・ごはん・・・」今度は、近づいて、信久朗の身体を触ると、父さんが近づいた事すら解らず、父さんに触られた途端、信久朗はびくつきました。

「どうしたんだ、信久朗・・・」そう言っても、信久朗の反応が今ひとつ鈍いのです。

「あっ・・・」

父さんは、驚きました。

信久朗は、音が聞こえないのだと、父さんは直感したのです。

何て事でしょう。

信久朗の聴覚が駄目になっているのです。

「なんだよ、信久朗・・・お前聞こえないのか・・・」

父さんは信久朗を抱きかかえ涙ぐみました。

あの傘で刺された様な傷が原因です、丁度、耳の後ろの頭を一撃されていましてから、信久朗の聴覚が麻痺してしまったに違い有りません。

父さんも母さんも大ショックでした。

「酷い事する人が居るのね・・・こんな優しい信ちゃんを傘なんかで刺さなくても」

母さんは、音が聞こえない信久朗が可愛そうでなりません。

それからの信久朗は、毎日何となくボーとする姿が目立つ様になりました。

音が聞こえないので、人が来ても動かず、パルが近づいても、ただボーっとして座っているのです。

その年の初秋になりました。

ある日、お客が家に尋ねてきた時です。お客は、犬が居るとも知らず、玄関の門を開けたまま、家に入ってきました。

その時です、信久朗が、玄関から飛び出して、外に出てしまいました。

「信久朗・・・駄目だよ・・・行っちゃ・・・」

父さんが大声で叫びましたが、信久朗には聞こえません。

信久朗は何処か近所に行ってしまいました。

でも、またいつものように、帰るだろうと、父さんも母さんも思っていました。

処が、その日も、あの怪我をした時と同じで、夜になっても帰りません。

翌日になっても帰りませんでした。

父さんは心配で、近所をくまなく探しました。

倒れていた畑も、少し遠い池が有る雑木林の周り、犬が沢山居る家の周り、探し回りましたが、信久朗の姿は何処にも見えません。

また、信久朗は、行方不明になってしまいました。

3 独りぼっちのパル

その日から、何日経っても、信久朗は帰りませんでした、行方不明の信久朗の手がかりは、全くつかめません。

考えられる近所は、殆ど探しましたが、何処にも居ません、さすがに父さんも、今度ばかりは、お手上げでした。

とにかく、信久朗が帰るのをひたすら待つしか有りません。
しかし一週間が経ち、半月が経てども、信久朗は帰りませんでした。

ただ、昔、信久朗が迷子になった時とはだいぶ事情が違いました。
この頃、父さんはお腹の病気で、手術をしました。
命に関わる大病で、父さんは大変な状態になっていたのです。
だから、信久朗が居なくなっても、昔のように、毎日探し回る元気が有りませんでした。
「残念だけど、この身体じゃ僕が探しに行くわけにいかないなあ・・・それに、何処に居るか見当もつかないしね・・・」

結局、何ヶ月経っても信久朗は、帰りませんでした。
「信ちゃん、何処かで倒れてしまったかもしれないわね」
母さんもととても残念で仕方有りません。
「さすがに今回は、探すのに限界だ、もしかすると・・・」
信久朗はかなりな老犬になり、音が聞こえないので、今回は、何処かで倒れてしまった可能性が大きく、もしかすると死んでしまったのではないだろうか、父さんは思っていました。

信久朗が居なくなって数ヶ月が経ち、いつの間にかコスモスが咲く、秋になってしまいました。

僕も信久朗が居なくて、とても寂しかったのですが、パルが居るので、その分パルと一緒に散歩を毎日しました。

でも、そのパルまで、歩くことがやっとでした。
「パパ、パル動かない・・・」
散歩に連れて行くと、パルは途中で座り込み、立ちません。
もう歩くのも嫌なほどでした。

夜、すっかり冷え込む季節になると、パルの様子が何かおかしいのです。
信久朗が居なくなってから、毎日同じ時刻、同じ行動をする様になりました。

「ウー・・・ウー・・・ウー・・・」
「あー・・・また泣いてる・・・しょうがないなあ・・・」

真夜中になると、パルは、遠吠えをしました。
決まって夜中の十二時から一時に、大きな声を張り上げて、遠吠えをするのです。
父さんも初めは、何でそんな遠吠えをするのか解りませんでした。

でもその遠吠えは、毎日毎日続くのです。

父さんは、ハッと気がつきました。

パルが遠吠えを始めたのは、信久朗が居なくなってからでした。

真夜中たった独りぼっちで庭に居て、パルは、寂しくて信久朗を呼んでいたに違いありません。

「何処に居るんだ・・・信久朗・・・」

「何してんだ・・・信久朗、僕は、ここにいるぞ・・・信久朗・・・」

パルは、毎日毎日、見えない信久朗に話しかけていたに違いありません。

その遠吠えは、近所中に聞こえる大きな声でした。

遠吠えが聞こえ始めると、近所迷惑になると思い、父さんは、夜な夜な床から起き出して、パルをなだめに行きました。

毎日、毎日、真夜中に、父さんは起き出して行きました。

そんな様子を見ていた、母さんとお婆ちゃんは、とても心配しました。

父さんの身体は、手術してからまだ良くなってないのに、夜中に起き出すなんて、大変だと、父さんを気遣いました。

でも、父さんは、パルの気持ちがわかるので、パルを叱らず、起きてはパルを散歩させ、なだめたのです。

「なあパル・・・信久朗は、何処かに行ったんだ・・・ご免な、見つけてあげられなくて」

「何処に居るのかな、信久朗は・・・なあパル・・・会いたいだろう・・・」

そう言いながら、父さんは、真夜中ほんの数分、信久朗を探す様に、近所を散歩させると、安心するのか？、あきらめるのか？、遠吠えを止めて、眠りました。

「お前、そんな事してらた、お前こそ死んじゃうよ、パルの散歩は、止めなさいよ」

お婆ちゃんが心配で、父さんに言いました。

「良いんだよ、母さん、僕は大丈夫だから・・・」

でも、真夜中の一時頃に毎日、毎日、散歩する事になり、父さんは、さすがに大変でした。

正直父さんも、真夜中に起こされて迷惑でしたし、身体が大変でした。

でも、けして家族には、大変だとは言いませんでした。

父さんは、パルを最後まで大切に可愛がりました。

ただ一日や二日で終わるなら良いのですが、その出来事は何ヶ月も続いたのです。

4 天国に行ったしんパル

二〇〇一年（平成十三年）三月。

真冬、冷え込みが厳しい季節になり、庭先に霜がおりています。

そんな季節になっても、パルの遠吠えは止みませんでした。

処が、三月中旬になり、パルの遠吠えがパタリと止まりました。

「どうしたんだろうね、パル元気が無い」

父さんは、パルの様子に変なのが気になりました。

朝、父さんが、仕事に出掛けようとする、パルは玄関先で横たわり、シッポを軽くパタパタと動かしましたが、起き上がろうとしません。

いつもなら、父さんの処に近づき、父さんに頭を撫でてもらうのに、その日パルは、立ち上がりません。

「どうした、パル、元気出せよ・・・」

父さんは、パルの様子に変なので、心配でした。

「パルどうしたのかしらね、ご飯も食べないし、水も飲まないの」

母さんがご飯をあげても食べようとしません。

「もしかすると、パル危ないかもなあ・・・」

父さんは、パルに死期が近づいていると思いました。

その日、一日パルはグッタリして、玄関先で動こうとしませんでした。

夕方、父さんは仕事から帰ると、またパルは、シッポをパタパタと振るのですが、身体は全く動かさせません。

「パル・・・大丈夫か・・・」

「今夜あたり・・・もしかすると駄目かもなあ・・・」

父さんは、パルを暖かい毛布に繰るんで、玄関の中に入れました。

朝から、食事、水も何も口にしませんでした。

はあはあはあ・・・パルの息が荒く、横になって動きません。

「パル・・・元気出せよ・・・なあパル・・・」

父さんはパルの頭を撫でました。

パルの様子は気になりますが、もう夜中になり、父さんも母さんも休む事にしました。

真夜中でした。

「うー・・・」パルのうなり声が聞こえました。

パルの最後の遠吠えでした。

父さんは、飛び起きて、パルの下に駆けつけました。

「どうした、パル・・・」

パルの息遣いが荒くなってました。

父さんは、夜中中、パルの様子を気に掛けながら、パルの側で休みました。

明け方。

パルは、微かに息をしていましたが、父さんが見つめる中、静かに眠るように目を閉じました。

「ママ、パルが・・・」

母さんも玄関に駆けつけました。

「パル・・・」

父さんと母さんが見つめる中、パルは静かに息を引き取りました。

パルが天国に旅立ったのです。

父さんと出会い、食パンを貰ってから、父さんをずっと慕って、パルは生きてきました。
大親友、信久朗と楽しく生き、沢山の思い出を作り、父さんと母さんに愛されて、その分パルも父さんと母さんに喜びを返してきました。

そして、パルは、信久朗を探す旅に出るように、天国に召されたのです。

パルは、筑波山の山奥、マーガレットが美しく咲く地に埋められました。
きっと、親友信久朗とパルは、天国の山々をじゃれながら、駆け回っているのです。
天国に居る、僕の大切な家族、信久朗とパルに、僕は伝えます。

「あきらめない心、友を愛する心を教えてくれて、ありがとう」

（ 完 ）